

2013年1月6日 新年礼拝説教（要約）

聖書 ペトロの手紙一 2章 11～12節

「旅人また寄留者として」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

今年も主日の礼拝において、主としてペトロの手紙から御言葉を聴いていきたいと願っています。この手紙は、ローマ帝国という異教社会の中で生きるキリスト者たちに、忍耐強く、愛と希望をもって生きるよう勧め励ます手紙です。今日の2章11～12節は、キリスト者として召し出された者たちが、キリスト教的なものを何も知らず理解しない人々の中で、具体的にどう生きるかということ、召使いとして、家庭にあっては妻として、夫として、どう振る舞い対処したらよいかを語っていく本論第二部の冒頭に置かれた御言葉です。

まずペトロは、「愛する人たち、あなたがたに勧めます。いわば旅人であり、仮住まいの身なのでから」と語りかけています。私たちキリスト者とは、旅人（パロイコス）であり仮住まいの身（パレイデーモス）だということです。後者はこの手紙の冒頭1章1節にも用いられていて、口語訳では「寄留者」と訳されていました。

もともと聖書は神を見上げて、御言葉に従って生きる信仰者たち、信仰の父祖たちの歩みを「旅人」また「寄留者」として描いています。ヘブライ11章は旧約聖書に記された信仰の父祖たちの歩みを振り返り、ちょうどアブラハムのことを取り上げるところで、13節「これらの人たちは・・・自分たちが地上ではよそ者であり、仮住まいの者であることを公に言い表したのです」と語っています。アブラハムやイサクやヤコブが遊牧民であったからというのではなく、彼らが信仰をもって生きた生き方を、旅人とか仮住まいの身という比喻で描いているのです。後にダビデは、神殿を建てる備えをなし終え、息子ソロモンにその建築を託して祈りを捧げている中で言っています、「わたしたちは、わたしたちの先祖が皆そうであったように、あなたの御前では寄留民にすぎず、移住者にすぎません」（歴代誌上29:15）。また、パウロはフィリピ3章20節で「しかし、わたしたちの本国は天にあります」と語ります。たとい立派な都を築き、あるいは生涯一箇所で暮し続けたとしても、神の召しに従い、神の約束とその御言葉に望みをおいて歩み続ける信仰者の生を、聖書は旅人また寄留者として表すのです。

旅人だからといって「旅の恥はかき捨て」などという無責任なことではないのです。あるいは世のことには無関心になり、世捨て人として過ごすのでもありません。この世のことに固執せず、しかし誠実に、遣わされたこの世の事柄に関わるのです。神の与えてくださる永遠の望みをしっかりと見据えながら、与えられた場所で、限られた時間の中で、神の御国を証して生きるのです。

そこでペトロは、私たちが旅人また寄留者としての歩みを全うするために大切なこととして、「魂に戦いを挑む肉の欲を避けなさい」（11節b）と語ります。肉の欲を避け

ると言ってもいたずらな禁欲の勧めではありません。肉というのは人間的なものすべてをさす言葉です。すなわち、私たちの魂を損なうような、この世に流されて、自分を見失ってしまうような生き方をしないように、ということです。

また、「異教徒たちの間で立派に生活しなさい」（12 節）と勧められています。立派に生活しなさいと真正面から言われると、私たちは面食らってしまって、どう応えたらよいかわからなくなってしまうところがあるかもしれません。しかし、この勧めを素直に受けとめたいものです。私たちは、信仰を持っていることが気恥ずかしくて、わざと悪ぶってみたり、周りの人たちにつまづきを与えてはいけないとか、物分りのよい人だと言われようとするばかり気を使ったりしていないでしょうか。

しかし、すぐ後に「彼らはあなたがたを悪人呼ばわりはしても」とあるように、当時のキリスト者たちは信仰生活のゆえに悪人呼ばわりされることがよくあったようです。初代教会の人たちは、あらぬ噂をたてられて苦しめられたり、偶像礼拝を行わないから、世の悪習に従わないから、反社会的だとののしられたりしました。そのような非難・中傷は、2000 年前のギリシアやローマ時代だけではありません。日本でも似たようなことがありました。キリスト教は日本には合わないのだとか、国を危うくするものだと言われて、つらい思いをした信仰の先輩たちも少なくないのです。今も状況はそれほど変わっていないかもしれません。また、信仰者は真面目すぎるとか、物分りが悪いと言って、敬遠されることもあるでしょう。しかし、そのような非難は世々のキリスト者たちが多かれ少なかれ経験してきたことなのです。だから心を弱らせてはなりません。

立派な行いをするのは、自分の評価を高めるとか、自分を表すためではありません。キリスト者のことを理解せず、自分たちに悪口を言っていた人たちも、「訪れの日には神をあがめるようになるため」（12 節）とあります。「訪れの日」とは、キリストに敵対していた人々のところにも、主が来てくださって、彼らが主を信じ、神を讃美するようになる時を指しています。私たちの主に聞き従う生き方が、神の不思議なご計画の中で用いられるのです。神の憐れみと恵みが、私たち人間の不真実や誤解や偏見やかたくなさを超えて、救いの御業を進めてくださるのです。神の恵みの勝利を信じ、終わりの日、共に神を讃美する日を目ざして、私たちは旅人また寄留者として歩み続けたいのです。

私たちはこの世にあって仮住まいの身であり寄留者です。天の本国を目指す旅人です。この地上に長く留まる時間はないのです。浪費する時間もないのです。2013 年の歩みが始まりました。この一年を、一時一時を、主の御心を祈り求めつつ、大切に過ごしていきたいものです。